

第33回日本保健医療行動科学会学術大会へのお誘い

第33回大会長 吉岡隆之 (大阪滋慶学園, 奈良学園大学)

ニュースレター前号(第94号)でもお知らせしましたが、第33回日本保健医療行動科学会学術大会が「健康でつながる調和的なライフに向けて—行動変容へのホリスティック・アプローチ—」をメインテーマとして、2018年6月22日(金)～24日(日)に沖縄県那覇市の沖縄県男女共同参画センター「ていする」(那覇空港から車で約10分)で開催されます(22日はエクスカージョンのみ開催)。大会実行委員が中心となり、本学会会員・役員・関係者のみなさまのご支援ご協力、さらには沖縄県(観光コンベンションビューロー)のご協力をいただきながら、大会の準備を進めているところです。

大会の内容もほぼ決まりました。大会のメインテーマに即したシンポジウムⅡ「健康でつながる調和的なライフに向けて」では、医療の立場(高山義浩氏、沖縄県立中部病院)、健康教育の立場(神谷義人氏、名桜大学)、死生学の立場(近藤功氏、沖縄キリスト教学院大学)から、沖縄の過去・現在・今後の展望も交えた刺激的なお話が聞けることと期待しております。その後の討論を含めて、ホリスティック・アプローチやホリスティック・ライフ(生命、生活、生涯)について貴重な示唆が得られると確信しております。特別講演では、ホリスティック医療に精通されている黒丸尊治氏(彦根市立病院)から「何が人を変えるのか—ホリスティックコミュニケーションの実際—」をテーマに、「心の治癒力」をうまく引き出すという視点を中心に据えたコミュニケーション、「質問力」の重要性などについて実践的なお話が聞けると期待しております。シンポジウムⅠのテーマ「語る・聴く・書く」は、本学会として今後も継続的に種々の取り組みを行う予定のテーマで、今年6月に発行予定の本学会雑誌第33巻第1号においても同テーマで特集が組まれることになっています。本大会においては、本雑誌の特集の執筆者のうち、聞き書き作家の立場(小田豊二氏、編集者・聞き書き作家)、看護師の立場(岡美智代氏、群馬大学大学院)、セラピストの立場(山崎久美子氏、防衛医科大学校)からご発言いただきます。「語る」「聴く」「書く」という一見なんでもない営みのなかに、どのような示唆に富む重要性が秘められているのか、実践的・具体的なお話しと討論が楽しみです。基調講演は、例年大会長が行うことになっていますので、私が、これまで約20年間、看護系大学の「行動科学」の授業で中心に据えてきた脳科学に基づく「ナラティブ」や「行動変容」のからくりについて、近代科学(特に客観)の限界もふまえてお話しする予定です。以上の4つのプログラムはメイン会場で行われますが、公開プログラムとして沖縄の保健・医療・福祉関係者(学生を含む)には安価で参加していただけます。本大会恒例の体験学習ワークショップは、「サイモン療法(田村祐樹氏)」「動作法(喜屋武享氏)」「シンギング・リンヒーリング(石井豊子氏)」「ラフターヨガ(笑いヨガ)(井上葉子氏、安藤和子氏)」「リラクゼーション下でのタッチング—受け手と実施者の相互交流—(山崎裕美子氏、佐藤都也子氏)」「レイキヒーリング(講師依頼中)」の6つを予定しています。

一般演題発表については、本大会では新たに健康行動に関連する実践(事業・活動)の発表も募ることになりました。これに伴い、従来の発表を「研究報告」、実践の発表を「実践報告」として募集を行っています。研究者ではない方も、日ごろの実践(事業、活動)について、少しまとめていただいても是非ご発表ください。

本大会会期のうち6月23日(土)は「沖縄慰霊の日」にあたります。当日は、大会場においても「慰霊と平和の祈り」の「時」をもちたいと思います。

本学会は、そもそも分野や所属、職階等の垣根を越えて、和気あいあいと楽しく交流できる雰囲気があると思いますが、沖縄の風土と相まって、さらに楽しくゆったり交流できることを願っております。

みなさまのご発表、ご参加を実行委員一同、楽しみにお待ちしております。また、お知り合いで、本大会に興味をもたれそうな方がおられましたら、是非とも、お声をかけていただけましたら幸いです。



イヌイット龍(ライデン民族学博物館のイヌイットの仮面から想起した龍)